

10. 三木町住民の集団意識(三木町)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田中, 泉 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/4886

10. 三木町住民の集団意識

田中 泉

- I. はじめに
- II. 農業と地縁関係を通じたの集団意識
- III. 「むら」の男性の集団意識
- IV. 「むら」の女性の集団意識
- V. 三木町の今後

I. はじめに

三木地区の三木町を調査することになり、実際に三木町へ行って家々を訪れた際いつも一番なされた質問は「どこについて調べているのか」という質問であった。私はその質問に対して初めは「三木地区の中の三木町です」と答えていたが、そのうちに「このむらです」というのが一番早くわかってもらえるということに気がついた。このことが、三木町の人々の中に、「むら」という一つの集団意識が存在しているのではないかという考えに思い至るきっかけとなった。

この「むら」という集団意識は、三木町の場合、とりわけ農業と様々な地縁関係、組織を通じて形成されている。以下では、まず農業と地縁関係による集団意識に注目して述べ、次に集団意識における男女の違いについて述べてみたい。

II 農業と地縁関係を通じたの集団意識

三木町は大聖寺川の下流の東岸に位置し、東に山を持ち、ほかは耕地に囲まれた農村地域である。農業地域においては経営単位は個別の家毎であっても、用水など共同使用するものがあり、各家が協力しあわなければ順調に農作物が作れないようになっている。そうした協調関係を調整し、さらに減反政策や政府からの補助金など、国との関係をとりもつ組織として生産組合が農家によって組織されている。そこでまずは農業に関して三木町住民の集団意識について述べていく。

三木町においては、1960年の当時8割の家が農家であった(1章、表-1参照)。家々は昔の主道である細い道を中心に密集して建てられ、そのかたちは現在でもうかがうことができる。1960年当時は、皆が農業機械を買うことはできず何軒かで共同して使用していた。そのため脱穀作業の際には、3~4軒の家の大人に子供も混じって朝から晩まで作業がなされるなどして、近隣の家族同士の交流は極めて親密なものになっており、家々のつながりが強くみられた。しかし、1970年代後半以降、三木町においても日本のどの農村でも見られるように専業農家と第1種兼業農家が減少してくると、それまでの集団による農業機械の共同使用から、個人による農業機械の所有へと移ることになった。この農業機械の個人所有化への移行は三木町においては1975~1980

表-1 農業の委託と機械数

		1970	1975	1980	1985	1990
委託	三木町	3	3	1	-	3
	熊坂町 (戸)	10	44	47	-	35
耕運機	三木町	67	83	90	61	62
	熊坂町 (台数)	60	40	28	17	3

資料出所『農業センサス』

年頃に見られる。

同じ三木地区の中で、三木町とは南の丘陵を挟んだところに位置し、三木町に匹敵する人口、世帯数を持つ熊坂町と三木町を比べてみると、表-1においてみるように熊坂では1970~1975年の間に農作業を委託する家が三木町よりも断然に多くなっている。そして、それにともなって耕運機の台数が減少して

いる。しかし、三木町ではその逆で、農作業を委託する家はごくわずかのままで、第2種兼業農家が増加するのにもかかわらず耕運機の所有台数も増加している(表-1参照)。三木町の地図を見ても「倉庫」の箇所が宅地に混じって多く見られる。ここから、三木町の農家では皆が農作業を他人に任せることはせず、自分の土地は自分で耕作しているという傾向が見られる。

第2種兼業農家においては外に仕事を持っていない年配者が農業を行う家とそうでない家があるが、後者の場合、農業に携わる家族成員はほかに仕事を持っているため、仕事の休みに農業を行うことになる。その際、農業機械が共同所有であったならば、どこかの家が使えば使えない家が出てくることになり問題となってしまうため、各世帯で購入することになる。この

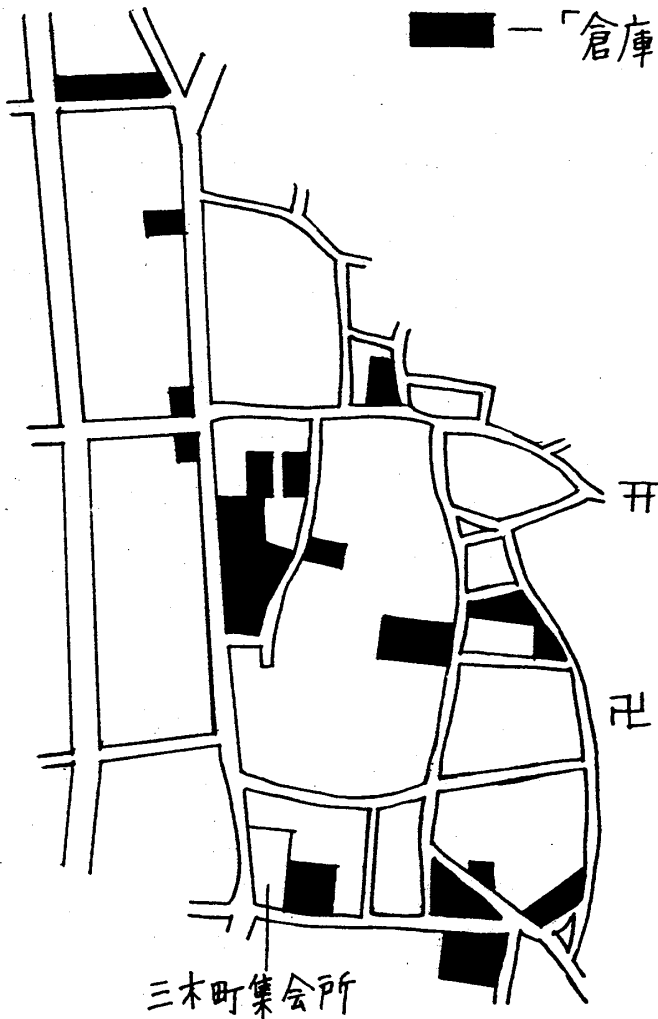


図-1 三木町の倉庫の分布

場合、機械を揃えたりそれを維持していく経費が農業収入と同等になってしまい、利益がほとんどなくなってしまうのが現状である。それならばどうして農業を続けているのかということになるが、伝統的な水田稲作の農村では農地に対する執着が強く、農地がなくなるということはいという意識が強いためであろう。三木町でも同様で、加賀インターチェンジができたことによ

り、いくつかの企業から土地を買い取る話があったが、皆土地を手離したがいなかったということが聞かれた。

このように、三木町の農業を通しての人々の交流というものは、農業機械の個人所有化によって減ってしまったものの、人々の農地への思いは以前と変わらず強い執着が残っており、このことが「三木町の町内に農地を所有している我々」という集団意識の土台となっているのではないかと考えられる。農地を所有している限りはその農地を維持してゆくため生産組合に所属し、他の農地を持つ家との結びつきを保つことが必要となるのである。

しかし、実際にその農地を耕す農家が3割に減少してしまった今日では、人々の集団意識形成において農業以外における地縁関係の果たす役割が大きい。それには、自治組織、氏子、門徒、保育所、小学校などのかかわりが挙げられる。

自治組織についてはここでは詳しく述べないが、町会費の徴収などは三木町では独自の方法をとり、これはむらの掟である「郷約」と同類のものと考えられ、「むら」という集団そのものを維持する働きを担っている。

また、三木町の産土社である御木神社や三木町にある勝林寺と住民の関係も、集団意識にとって重要な意味を持っている。御木神社の建造物はほとんどが三木町の人々の寄贈品であり、そのいずれの寄贈品にも寄贈者の名前が刻まれており、参拝者にわかるようになっている。管理は町会で行っており、年1回1軒から1人ずつ集まって掃除をしている。御木神社の一番大きな行事は秋祭りである。この日には人力でのぼりが建てられ、子供たちがみごしを担いで町内を周り、青年団は獅子舞を舞う。夜になると人々が神社に集まってきて輪踊りなどが行われる。この時に、日常あまり顔をあわせない「むら」の人々が一同に顔を合わせ、お互いに顔を確かめることで集団意識を強めるのだと考えられる。

一方勝林寺においても、住民のほとんどは同寺の門徒であり、また、三木町以外の門徒の人々もなんらかの形で三木町と関わっていた人々であることから、三木町の「むら」との関わりが深いと考えられる。このことは、総代の3人が三木町の人で固定されていること、世話方を三木町の5つの各班から1人ずつ持ち回りで出すこと、大きな行事には区長、副区長、相役の三役が協力することからもいえる。御木神社も勝林寺も、三木町の人々から多額の寄付や寄進がなされて成り立っている。

次に、保育所、小学校についてであるが、この2つは加賀市立のもので、三木地区が通学、通所区域となっており住民にとって大切な施設である。生活の便利さからみると、家の近くに保育所や小学校があることは重要なことである。車で送り迎えする必要がない上、家にいるお年寄りでも送り迎えが可能になるからである。仕事を持つ親にとってはとても助かることになる。保育所や小学校へ通っているのは三木町の子供だけではないが、三木町の「むら」との関係でみると、「むら」の中に建物があり、その子供が約半数を占めることから、「むら」の人々のこ

の二つの施設への思いは強いと考えられる。「むら」の中にこれらを残そうという思いは三木町の人々の共通の思いであり、少子化に伴う三木小学校の児童数の減少に頭を悩ましているのが現状である。

Ⅲ 「むら」の男性の集団意識

かつての三木町では、「おとっちゃん」を絶対視し、皆が従ったということが聞かれた。現在ではこのようなことはないということであるが、進学、就職などのために一度三木町を離れた男性であってもその多くが嫁をつれて戻ってきたり、退職後に戻ってきたりするということが聞かれ、男性にとって、「むら」に腰を落ち着けることは自然なことだと考えられていることがわかる。このことは長男だけでなく、次男、三男にもいえるということから、三木町の「むら」の中の男性は三木町で生まれた人が多く、「むら」の人々は幼い頃も含めて相互に親しい間柄であり、自分自身も「むら」のことはよく知っているため、「むら」の一員という意識が強いということがいえよう。

三木町における自治組織のうち特に男性と関係の深いものをみると、青年団、愛郷会、むつみ会と、高校卒業時から連続して加入するような仕組みになっている。このなかで注目すべきものは青年団である。その活動の主なものとして秋祭りにおける獅子舞がある。この獅子舞というものは、三木町においては青年団に入った男性が「むら」の中で一人前の成員として認められるための通過儀礼の1つであると考えられる。獅子舞を演ずるのに必要な人数は、獅子に4人、槍つきに1人、笛に2～3人、太鼓に1～2人と8～10人であるため、現在いる団員だけでは足りない場合はOBがきて手伝うなどして獅子舞を存続させる努力がなされている。秋祭り際には、朝7寺に出発して「むら」の家々を回り、舞いを舞って御祝儀をもらう。その時に小学校も回り、全校生徒に舞いを見せる。三木町の子供の反応としては、「ちょっと面白い」、「なかなかいい」ということが聞かれた。練習しているところも子供たちが見に行くということから、これから青年団に入る「むら」の男子児童に「憧れ」として映り、自分も獅子舞に参加したいという気持ちが生まれるものと思われる。数年の間一緒に練習をし、一緒に祭りに出たもの同士のつながりは強く、団員であった人の結婚式にメンバーが行き、獅子舞を披露するということが行われている。しかし、高校卒業後三木町から離れてしまう人や、仕事場が遠くにあるために時間的余裕がないという人が現在では多く、青年団への参加率は低くなってしまっている。

Ⅳ 「むら」の女性の集団意識

現在三木町で生まれた女性は「まち」に出てしまうと三木町に戻らずほかの所へ嫁に行ってしまうということが聞かれた。その一方で「三木の女性は働き者だ」ということがよく聞かれた。というのも、三木町において女性は外へ出て働ける間は働くという考え方が主流となっており、

何の理由もなく外で仕事をしないことはあまり良く思われたいからである。従って、三木町に来た嫁は、子供が生まれるまで近くの工場などで働くといったような形がとられており、「自分の娘は三木に嫁にやりたくない」という声も聞かれた。「三木のむらの女性」になるには、「働き者」でなければならないのであり、このことが、三木町で生まれた女性が外に出ていってしまうことの1つの要因となっているのではないだろうか。

一方、他の地域からやって来た嫁の場合、「むら」の人々との関係や、「むら」の組織との関わり合いがゼロからのスタートとなる。さらにかつては、「むら」独特の言葉使いや行動様式があり、これが解からなければコミュニケーションもとれないことになってくる。「三木に来たばかりの頃は道ですれ違った人をなんて呼べばいいのかわからなかった」ということも聞かれた。

他の地域から嫁いで来た嫁の場合、夫の家に入り、初めはよそ者としてみられ肩身の狭い思いをする。しかし、そのうちに、家の年配者から「むら」の習慣を教わる。例えば、「むら」の中で人に会ったら先に声をかけ、その際「おば」、「ねえさん」、「にゃあにゃあ」などと年齢別な呼び方で呼ぶというものがある。そういった「むら」の習慣に慣れてくると次第にむらの一員として認められ、本人も知らない間に自覚してくる。現在では、「にゃあにゃあ」という言葉は実際には使われておらず、標準的な言葉が使われている。また、嫁を迎えるときは新しく家を建てる傾向があり、やって来た嫁は客扱いされ、農業をしている家の場合にも農作業は手伝わなくていいとされる。しかし、「嫁は初めは農作業をしないけれど後になつたらするようになる」ということも聞かれた。また、結婚しても多くの女性は外の仕事を続けるという形になっており、以前は「むら」に来た嫁がどこの嫁か人々に知られていたのが、「最近では道ですれちがってもどこの嫁かわからない」ということが聞かれた。

自治組織については、以前は女性も青年団に加入しており「むら」の男女が知り合う場であったが、現在は女性は加入していない。従って、未婚の女性の組織は存在せず、既婚者が婦人会から親和会と加入していく。このメンバーは別の地域から嫁に来た人がほとんどとなるため、嫁に来てからそれほど年数が経っていない人々は婦人会においてもあまり活発に活動しないのが現状である。しかし、婦人会はJA（農協）婦人部、三木地区の婦人会の支部が合わさっており、また、PTAにおいても同じ人々が顔をあわせることが多くなっているため、三木町に来てしばらく経つと友達もでき、三木町に来た嫁同士でつながっていく。

親和会に属している女性は外から三木町に来た場合でも30年から40年が経っており、自分が生まれたところよりも三木町にいる年数が長くなっている。「むら」のことに関しては非常に詳しく、「むら」の一員としての意識は強い。

以上のように、現在では女性の場合は三木町に生まれた女性の多くが「むら」の外へ婚出してゆくのに対し、他の地域から嫁にやって来た女性が次第に三木町の「むら」の中で集団意識を形成していくことになるのである。

V 三木町の今後

今、三木町では町を盛り上げようという計画がなされており、その1つに「マスタープラン」というものがある。これは三木町在住のA氏(30歳代の男性)が考案者であり、A氏が中心となって進めているものである。この中では、休耕地の宅地化、北陸自動車道インターの周りへの企業誘致といった具体策が挙げられているが、これに対しては「むら」の人々の間で様々な意見の違いがみられる。賛成の人、反対の人、今更そんなことをしても遅いという人などがおり、反対の人の意見には、「よその人には来てほしくない」、「三木と関係のある人に残ってほしい」、「三木から離れて住んでいる人に戻ってきて世帯を持ってほしい」というものがあった。また、「むらの景色はあまり変わってほしくない」という声も聞かれた。賛成の人も、たとえよその人であっても「むら」に人が入ってくることで「むら」が活性化すればよいという「むら」への思い入れがあり、これらの意見は内容は異なるにせよ皆「むら」という集団意識の現れであると考えられる。

また、2年前から「夏祭り」が「むら」を挙げて行われている。この行事はそれまで行われていた海水浴が、「むら」全体が参加できるようにということで形を変えたものである。このときには、集会所に劇団を呼んでみんなで見たり、年齢別、性別の各組織で食べ物を売ったりして「むら」の住民全体の交流が図られる。この行事に参加すれば、お互いに外で仕事をしていて滅多に顔をあわすことがなかった人も知り合って、どこの誰だということが確認できる。外で仕事を持つようになってから失われつつある年齢別、性別の集団間のつながりをつくる場となっている。こうして住民全体が知り合うことでお互いを「むら」の一員として認め、「むら」の集団意識の強化をしている。

大聖寺へは車で5分、インターチェンジも近いという立地条件を持つ三木町においては、生活していく上で不便なところではなく、一度「むら」を離れてしまった人でも帰りやすいところであるといえよう。しかし、今後において、交通網の発達により、通勤圏の広がり、他の地域への出易さにより、青年団への参加率の低下が進ことが予想される。そうなるとう男性の集団意識はだんだん薄くなっていき、このことは、むら全体の集団意識の薄れとなってくるのではないかと懸念されるのである。